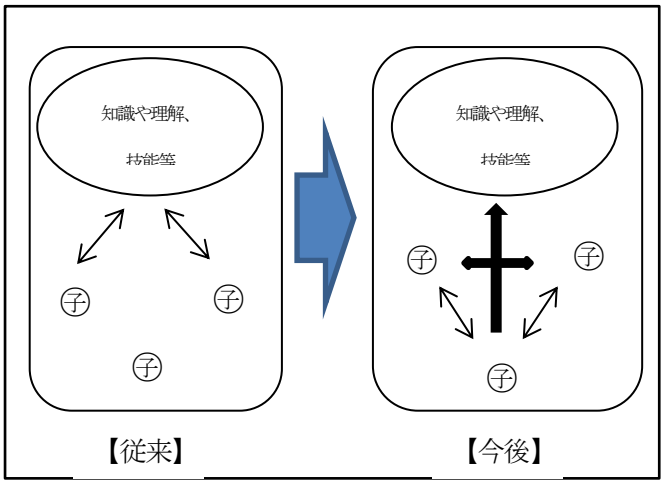
喜多方市の３つの共通実践①
学　力　向　上

１　授業の質的改善

（１）「教師が話す」から「子どもがかかわり合い創る授業へ」

見方・考え方を変える～教授から獲得へ～

子どもたちの思考力・判断力・表現力といった能力を培いながら、アイディアを出し合い、共に活動しながら（共働）、みんなで授業や活動を創り上げていく（共創）ようにするためには、知識や理解、技能等、私たちが子どもたちに伝えなければならない重要な内容の習得についての見方・考え方を教師自身が変えていくことがとても重要です。（下図参照）



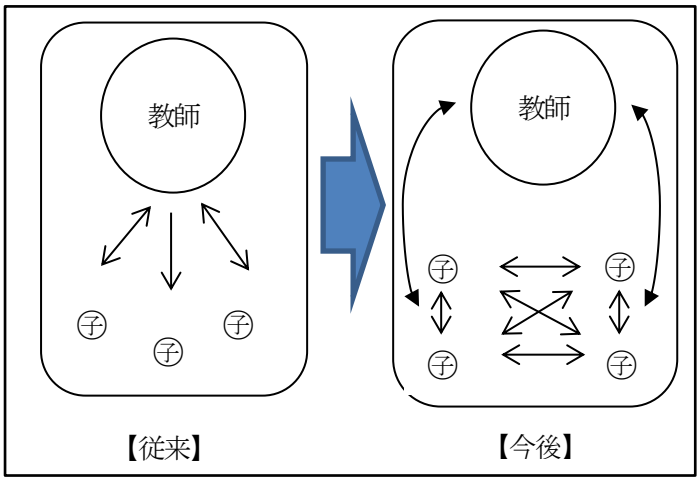
○　従来は、知識や理解、技能というものを教師が子どもたちに身に付けさせる。しかも、効率よくという考えが主流でした。

＊　今後は、子どもたちがコミュニケーション能力を発揮して学び合いながら、知識や理解、技能というものを発見したり、獲得したりできるように教師が支援していく。
そのような授業が求められています。

（２）　子どもどうしが学び合える環境の工夫

見方・考え方を変える～一対一から集団へ～

子どもたちを独りにせず、共働・共創の力を身に付けさせるためには、教授形態にメスを入れることが必要になります。別の言い方をすれば、「教師の立ち位置」を変え、子どもたちのかかわり合いを最優先する中で、教師もその関わり合いの中に入っていき、子どもと共に考える授業スタイルへの改革を目指すということになります。



○　従来は、教師の権力が非常に強い、管理教育がその主流です。授業の実権を教師が握り、常に教師は黒板の前に立ち、子どもたちのとのやりとりを板書していくというパターンです。

＊　今後は、授業の主導権を子どもサイドに切り替え、子どものコミュニケーション力を育てながら、子ども間のかかわりの中に教師が入っていき授業を進めるというパターンになります。

これまでの教授形態を考えると、教師が黒板側に立ち、授業をリードしていきます。子どもたちは、姿勢を正して教師側を向き、教師から投げかけられた発問に対し、分かれば挙手し指名されれば答えるという形態です。時にペアやグループによる話し合いもありますが、多くの時間は、「対教師対応」に追われるのが常で教師対個の場面を繰り返しながら授業が展開されていきます。しかし、こどもを独りにせず、さらに、思考力の育成を重視し活用力が身に付くようにするには、子ども間のかかわり合いを授業のベースとし、そのかかわりの中に教師が入って、子どもたちを高めようとする営みが必要になるのです。